

雑司ヶ谷・鬼子母神

2014年11月

池袋駅 ⇒ 自由学園 明日館

⇒ (東通り めがね屋経由) 威光稻荷・法明寺 ⇒ 雜司ヶ谷 鬼子母神

⇒ 雜司ヶ谷住宅地域の散策 (昭和の風景探し)

⇒ (目白台経由) 東京カテドラル教会 ⇒ 椿山荘 (園内散策)

⇒ 永青文庫 ⇒ 胸突坂 ⇒ 関口芭蕉庵 ⇒ 肥後細川庭園



自由学園明日館

自由学園明日館は、羽仁吉一、もと子夫妻が理想とする教育を目指して1921年（大正10）に創立した自由学園の校舎。帝国ホテル設計のため来日していたフランク・ロイド・ライトが設計した。ライトは羽仁夫妻の目指す教育理念に

共鳴し、「簡素な外形のなかにすぐれた思いを充たしたい」との夫妻の希望を基調に設計した。

建物は次のような特徴をもつ

- ① 木造で漆喰塗
- ② 中央棟を中心に左右に教室棟が配置されたシンメトリー
- ③ 高さを抑え、地を這うような佇まい

この建築様式はプレリースタイル（草原様式）と呼ばれ、ライトが故郷のウィスコンシンの大草原から着想を得たもの。道路を隔てた南西には、弟子の遠藤新が設計した講堂がならんでいる。自由学園は1934年（昭和9）に東久留米市に移転、明日館は主に卒業生の事業活動に利用してきた。

1997年（平成9）、国の重要文化財指定を受け、1999年（平成11）から2年半をかけて保存修理工事が行われた。



自由学園明日館

雑司ヶ谷は池袋から意外と近い。明治通りを渡り、「東通り」を東に向かって10分足らず、右手に老眼鏡の安売り店「老眼めがね博物館」がある。店の前面がすべてめがねで覆われた変わった建物で、度数ごとに老眼鏡が山積みされ数百円で安売りされている。その先、墓地の壙を超えたところの小道を右折する。右手が墓地の壙のなだらかな小道で、坂を下ると雑司ヶ谷である。



老眼めがね博物館



法明寺横の路地

威光稻荷

坂の途中、左手に威光稻荷がある。鳥居に誘われて奥に進むと大きなイチョウの木を中心に茫茫とした空間が広がり、気のせいか狐の気配を感じられる。

伝通院に近い澤蔵稻荷もそうだが、稻荷の中には足を踏みいれるのを一瞬ためらう何かの気配を醸し出すところがある。



本堂にある提灯には鬼の字の上の角がない。理由は、この鬼子母神像が鬼形ではなく菩薩形の美しい姿をしているので、鬼はそぐわないとのこと。

境内には元禄年間から続いているという駄菓子屋（川口屋）がある。

また境内のすぐ外に昔どこかで見たことがあるようなモダンな洋装店（仕立屋）の建物がある。

鬼子母神参道には樹齢 400 年のけやき並木があり、東京都の天然記念物に指定されている。

並木に沿ってすぐ家並みがあり、保存上は問題がありそう。



駄菓子屋（川口屋）



鬼子母神参道のケヤキ



境内近くの洋装店

雑司ヶ谷一丁目、二丁目

都電荒川線が参道の入口付近を通っている。踏切を渡ると、雑司ヶ谷の住宅街に入る。かつて雑司ヶ谷や鬼子母神のあたりでは、線路が家並の間を走っており、それなりの趣があった。

鬼子母神

坂を下りると法明寺の正面に出る。ここから 100 メートルのところに雑司ヶ谷の鬼子母神がある。鬼子母神は、都内ではここ雑司ヶ谷と入谷がよく知られている。雑司ヶ谷の鬼子母神は 1578 年に創建された。現在ある本殿は 1664 年に建立され、豊島区内で最も古い建造物である。江戸時代から今日まで、子授け、子育ての神様として信仰を集めてきた。

寺の説明によると、鬼子母神はインドの夜叉神の娘で、嫁いで多くの子供を産んだ。だがその性質は凶暴で、近隣の幼児を食べるので人々から恐れられた。お釈迦様は、過ちから彼女を救うことを考え、末の子を隠してしまった。彼女の歎き悲しみ、お釈迦様は

「千人のうちの一子を失うもかくの如し。いわんや人の一子を喰らうとき、その父母の歎きやいかん」と戒めた。彼女は今までの過ちを悟り、お釈迦様に帰依し、その後安産・子育の神となることを誓い、人々に尊崇されるようになった。

鬼子母神の踏切際にはバラック作りの焼鳥屋がいい匂いを立て、戦後の趣を残していた。しかしこの10年、開発の波がじわじわと押し寄せている。線路際の家は立ち退いて新たに道路が作られ、副都心線の駅ができた。数分で池袋や新宿三丁目に行ける地の利が雑司ヶ谷のこれからを大きく変えていくことになるのかもしれない。しかし、鬼子母神から荒川線の踏切を超え、道路を一步入るとそこは今も昭和がそのままに残っていて40年タイムスリップしたようだ。私が育った頃のいわゆる中流の住宅街と下町がミックスしてほぼそのままここに残されている。路地は迷路のようで、行き止まりに井戸がある。坂を下りると暗い小さなスーパーマーケット、右に曲がればせんべいの町工場。意外性に富んだ何かありそうな予感のする町だ。



せんべい工場

三角寛と山窓（サンカ）

日本女子大の寮の横を過ぎると三角寛の旧居にでる。現在は黒塀で囲まれた高級日本料理店「寛」が営業している。三角寛は『山窓物語』でサンカを世に知られしめた人物である。サンカは、日本の川の縁にセブリ（瀬降）という天幕小屋を作つて住み移動した特異な集団であり、日本のジプシーという人もいる。農家が使う箕（竹を編んだ農具）を作り修理し、近辺部落の仕事を一通りますと、天幕をたたんで次の場所に移動した。純粋の大和民族を任じ体制に捉えられていない「自由人」とも考えられている。全国的な組織をもち、丹波（京都府）に統率者がいた。「自由な空間」がなくなっていた江戸時代から明治を経て数は減少、一般人にとけこみ第二次大戦後はほとんどいなくなった。しかしサンカは三角寛の創作であるとして、はなから信じていない人も多い。1970年代はじめに中国山地の津山を調査した時、花売りのため町に下りてくる人を地元の人は「サンカだ」といっていた。また、「川の方に行くと引きずり込まれて帰れなくなる」という言い伝えが各地にあり、多くは河童のせいにされているが、実はサンカだという説もある。サンカの美しい女性の魅力であつちの世界（サンカ社会）に取り込まれるから気をつけろという解釈もできる。いずれにせよサンカには、虚実多くの話があり、その火付け役が三角寛だった。





東京カテドラル教会

前の聖堂は第二次世界大戦で全焼し、丹下健三の設計で、昭和38年（1963年）に起工、昭和39年（1964年）落成した。特徴的なカーブを描く八面のコンクリートの壁を垂直に近く立てた構造で、天井は大十字架をかたちづくりっている。

外装のステンレス張りの輝きは、社会、人々の心の暗闇を照らすキリストの光を思わせるものという。



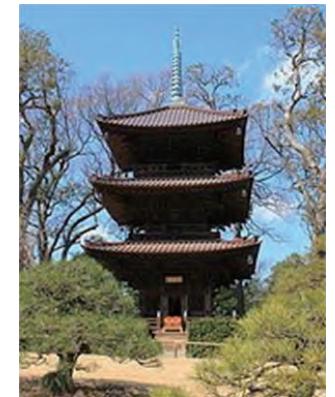
東京カテドラル教会

椿山荘

武蔵野台地の東縁部、関口台地から神田川に下りる傾斜地にある。椿が自生する景勝地で、江戸時代は久留里藩黒田氏の下屋敷だったが、山縣有朋が西南戦争の功により年金 740 円を与えられ、1878 年（明治 11 年）に購入、自分の屋敷として「椿山荘」と命名した。

1918 年、藤田財閥が購入し、戦後、藤田觀光の所有地となり、1 万余の樹木が移植され 1952 年に結婚式場として開業した。1992 年には、

敷地内にフォーシーズンズホテルが開業した。庭園は一般公開され、椿や桜など植物、史跡等を鑑賞できる。庭園の頂上に建つ三重塔は、広島県加茂郡入野（現東広島市）の竹林寺にあったものを 1925 年に譲り受け、椿山荘に移築した。繩形の特徴などから室町時代末期のものと推定され、国の登録有形文化財に登録されている。



椿山荘にある三重塔

永青文庫と肥後細川庭園

武蔵野の面影を止める目白台の一画に、江戸時代に熊本細川家の下屋敷があった。

戦前まで細川家の屋敷であったが、現在、目白台台地が神田川に落ち込む

斜面地の起伏を活かし変化に富んだ池泉回遊式の庭園となっている。

この公園はこれまで新江戸川公園と呼ばれていたが、改修を機会に

2017年3月より名称を肥後細川庭園に改められた。

池はこの庭園の中心に位置し、池を挟んで背後の台地を山に見立てている。

斜面地は深い木立となり、秋には紅葉が池に映って美しい。

また台地の一隅には、細川家に伝わる歴史資料や美術品を管理し一般に

公開している永青文庫がある。1950年、細川家に伝来する文化財の散逸を

防ぐ目的で財団法人として設立され、一般公開されている。



胸突坂と芭蕉庵の入り口



芭蕉庵



肥後細川庭園



永青文庫

芭蕉庵

松尾芭蕉（1644～1694）が、33才の時から3、4年間この地に住んだ。

当時、芭蕉の主家である藤堂家が神田上水の改修工事を行っており、

この関係で芭蕉が関わり、この地にあった水番屋に住んだといわれている。

芭蕉の33回忌にあたる年に記念の建物が敷地内に作られ、その後、芭蕉の

供養のために芭蕉の真筆の短冊を埋めて作られた「さみだれ塚」が建立された。

これが現在の芭蕉庵につながっている。